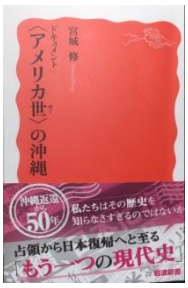
『ドキュメント〈アメリカ世〉の沖縄』を読む



著者は琉球新報の宮城修・論説委員長。本書は占領から日本復帰へと至る「もう一つの現代史」である。「沖縄返還から 50 年」の今、多くの人に読んでもらいたいので、すこし紹介したい。

〈アメリカ世ゅ–〉の「世」とは、しまくとぅば（琉球の言語）で「時代」を指す。琉球・沖縄史の時代区分について、その時々の大国との関係で表現することがある。1879 年、琉球王国は明治政府に併合され沖縄県が設置された。〈大和世〉の始まりだ。

〈大和世〉は、県民の 4 人に 1 人が犠牲になるほど激烈な沖縄戦によって 66 年間で途切れた。1945 年 3 月 26 日に慶良間諸島、4 月 1 日にその東方の沖縄島へ上陸した米軍は、沖縄を日本から切り離し占領・統治した。〈アメリカ世〉の始まりである。

本書は、琉球新報が連載した大型企画「沖縄戦後新聞」(2016 年 6 月～17 年 5 月、全 12 回)で取り上げた出来事を縦軸に、同時代を生きた 3 人の政治家の歩みを横軸にして構成している。「沖縄戦後新聞」は、米国統治時代に沖縄の人々が日米両政府とどのように向き合ったのかを問い直す企画である。

12 の出来事は、屈辱の日(1952 年 4 月 28 日)、島ぐるみ闘争(1956 年)、瀬長市長誕生(1956 年)、宮森小ジェット機墜落(1959 年 6 月 30 日、写真)、キャラウェイ旋風(1963 年)、佐藤首相来沖(1965 年 8 月 19 日)、主席公選(1968 年 11 月 10 日)、2・4 ゼネスト回避(1969 年 2 月 4 日)、コザ騒動(1970 年 12 月 20 日)、レッド・ハット作戦(1971 年)、通貨確認(1971 年 10 月 9 日)、施政権返還(1972 年 5 月 15 日)。

沖縄戦後新聞

宮森小に米軍機墜落

児童12人ら18人死亡

国内外が戦後最大の事故も

操縦士、落下傘で脱出

「最大要因は整備ミス」

米空軍、報告書で結論

本書が扱ってきた〈アメリカ世〉を終わらせた最大の要因は、沖縄の人々の民意である。圧倒的な力を持つ米国に自治権拡大を訴え続け、その象徴として主席の直接選挙を認めさせ屋良朝苗を当選させた。1968 年の主席就任後初めて佐藤首相と会談する直前、屋良は在京のテレビに出演した。佐藤に伝えたいことを問われ、屋良は「民意を率直に確認してもらって、国の政治に、外交に十分反映していただきたい」と述べている。

しかし佐藤は、その後の施政権返還交渉で屋良の公約「即時無条件全面返還」を選択した沖縄の民意をくみとらなかった。2022 年の今も国土面積の 0.6%の島に全国の米軍専用施設の約 70%が集中する。

半世紀前の「民意」は〈大和世〉を生きる沖縄の人々にも受け継がれている。沖縄県民は県知事選挙や国政選挙、住民の直接的な意思表明（県民投票）、司法への提訴など民主主義の手続きを駆使して辺野古新基地建設に抵抗し、自らの未来は自ら決めようと模索している。

(2022 年 4 月 10 日)